（城西人文研究第14号）

アポリネールの恋の詩と真実

堀田郷弘

はじめに

「詩人は創造する人です。何よりまず詩人によって想像されなければ、この世界に何一つもたらされないし、一般の人々の眼には何も現れてこないのです」（文献A—4、恋文51）アポリネールが恋人の一人ルーに送った手紙に書かれている一文ですが、ここには、アポリネールが詩によせる全能的な力への信頼、そしてその詩作を天職とする誇りが自信をもって語られています。

詩人アポリネールには、生来的に、彼をとりまく生の現実を〝浮遊なもの〟でしかないと考えていたところがみられます。そのため、たえず自分の合一性を求める強い欲求を生涯もち続けてきました。彼は、詩のなかに、とりわけ〝日常の生の詩化〟あるいは〝日常の生の在り様としての詩化〟つまりは生を不滅にする詩の力のなかに、自分の生存の証しを構築しようとする傾向があります。このように詩によって定着する生の集合体を——研究家デコーダンのいう「夢みられた自伝」une autobiographie rêvée（文献B—2、p. 107/Michel Décaudin: *Apollinaire à la recherche de lui-même*, 1966）と言い換えることができますが、詩人にとってこれこそが生の真実だったのでしょう——最もよく表しているのが、生の燃焼の典型ともいうべき恋の詩と真実であると思います。

詩人の別のことばを借りれば、それはまた「寓話」fable とも言うことができます。

「……寓話は、大部分が、いやそれ以上に現実のものになっているが、新しい寓話を想像によって創りだすのは、詩人の任務であり、発明家がそれを受けて現実化する」(『新精神と詩人たち』*L'Esprit nouveau et les Poètes*, 1908)

つまり〝詩人の恋〟という「寓話」です。では「発明家」になるのは誰でしょう。ここでは私たちがなるのです(あるいは「現代詩人は、創造者、発明家、予言者である」とも言っているように詩人自身かもしれません)。しかし詩人の言うように、かつてのイカロスの寓話が現代の飛行機として現実化されたという方式ではなくて、ここでは、人間の「生の本然である愛」(前掲恋文51)の領域において詩人が新しく開拓し、創造したものを、私たちが私たちの時代のその領域に現存させることによってです。

それには、詩人の作品にあらわれた〝愛〟の創造の姿だけではなく、それらを含めてまさしく詩人の〝作品〟とも言うべき生涯の恋の諸相を知ることが必要でしょう。

しかし言うまでもなく、詩人の生涯の恋とは、詩人が体験した恋の諸事実の羅列や目録ではありません。むしろそれらの諸事実の相互の関係のなかに浮かび出てくる意義、あるいは諸事実を対照させることから聞こえてくる詩人の恋の〝うた〟です。事実はそのままでは真実をうたいません。こうした意味では、むしろ、アポリネールにつきまとう豊かな伝説は、いかに正確な事実とかけ離れていようとも、〝うた〟にとってはまことに貴重な要素と言えます。誤解を招くかもしれませんが、あえて言うならば、普遍的な事実とは、生きる各自にとっては、実体のないものであり、存在しないものではないでしょうか。少々私事になり過ぎますが、そうした実感をもたされたささやかな体験の一つを紹介しておきます。

かつてパリのまちをセーヌ川に架かる橋ずくしによってそい歩いたことがあります。その時、私は、アポリネールの恋人の一人マリー・ローランサンとのことを歌った有名な詩『ミラボー橋』*Le pont Mirabeau* (1912) を読んで

私の心に現存させていた〝ミラボー橋〟を懐いて、現実のミラボー橋と初めて出会いました。私の目の前には、小さな鉄の橋、赤茶けたやせた橋、その下を流れる水も濁り、川面には塵さえ浮かんでくるような現実の橋がありました。あれからもう何年たったのでしょう。あれから何度見たのでしょう。あの現実のミラボー橋は、今の私には初めての対照のときと同じように、あれは別の橋であり、いや〝ミラボー橋〟ではありません。土木家によって造られた橋ではなく、詩人アポリネールによって創られた橋、それが私の〝ミラボー橋〟なのです。

ミラボー橋の下をセーヌが流れる
　二人の恋も
　僕は思い出さねばならないのか
喜びはつねに苦しみのあとにきた

夜よこい　鐘もなれ
日々はすぎ　僕は残る

（第一節、窪田般弥訳）

Sous le pont Mirabeau coule la Seine
　Et nos amours
　Faut-il qu'il m'en souvienne
La joie venait toujours après la peine

Vienne la nuit sonne l'heure
Les jours s'en vont je demeure

このリリスム輝くアポリネールの名詩によって私が現存させている橋こそ、私にとってのミラボー橋の事実であり、現実であり、つまりは真実なのです。私はつくづく思います、おそらく現実は、私たちの眼で見ることによって在るのではなく、魂の共鳴の響きによって存在するものではないかと。

さて、こうした考え方に立って、アポリネールの恋の〝うた〟によく耳を傾け、アポリネールが創造した恋の〝詩と真実〟をさぐってみたいと思います。

一　母、コストロヴィッカ夫人

ギョーム・アポリネール、本名 Wilhelm-Albert-Vladimir-Alexandre Apollinaris de Kostrowitzky の生涯はわずか三十八年です。一八八〇年八月二十六日、彼自身のいう「ロシア祖帝の血」descendant de Rurik, premier souverain de Russie（文献A―4、恋文99）を受け継いだポーランドの名家出身の母とシチリアの軍人を父（推定）として、ローマに生を受け、一九一八年十一月九日、その二年前の頭部の戦傷が原因とも考えられるほどあっけなく、流行のスペイン風邪で、パリの地で亡くなります。

誰しも生まれつき詩人ではありえないのですが、のちに前衛、革新、奔放な詩人像をつくり上げるこのアポリネールに対しては、私たちは、その出生から、さまざまなロマネスクな要素をさぐり求めます。父母から流れる南欧と北欧の血、祖父のポーランド独立闘争の志気、父の享楽を愛する軍人の生き方、母の賭博狂の生き方など、夢と真を織

りまぜたその出生を彩る伝説的要素も豊かです。それに加え、彼自身の生き方、とりわけその愛においては、情熱の激しさと詩人の天性が混沌としてまざり合い、〝詩と真実〟の興味深い世界を創りだしています。そうした詩人アポリネールの恋における〝詩と真実〟――批評家プーポンのいう「現実と不思議が融合する神話」(文献B―2、p. 52: M. Poupon)――を、その作品と生涯のなかに探っていきます。

さて、アポリネールの恋をとりあげる場合、彼が詩を捧げたり、詩にうたったりした恋の相手を語る前に、その母について語る必要があります。恋人のように母をうたい込んだ詩はほとんどありませんが(詩集『アルコール』*Alcools*, 1913の一篇『門』*La Porte*, 1912)、愛についてはまず男性としてのがれるすべのない母の存在を、彼の女性観の源として一応さぐっておかねばなりません。

アポリネールの母は、アンジェリック=アレクサンドリーヌ・コストロヴィッカ Angélique-Alexandrine Kostrowicka。詩人は本名あるいは手紙などの正式な場合にコストロヴィッキーという姓をよく用いていますが、これは母方の姓なのです。母親はリトアニア出身のポーランドの名家の流れをくむ女性です。詩人は、この母方の血統を拡大して、よく「ロシア建国の祖帝の血」として誇りにしています。母方の祖父は、ポーランド独立運動に参加し、こと破れて、イタリアに亡命し、ローマ教皇庁に勤めます。そのため母はローマで教育を受け、前述のイタリア将校であった父と結ばれたと伝えられています。愛国の志士を父とし、南欧文化の中心ローマの教育を受けた母は、上流社会の女性特有の優雅さを失わないが、まさしく、生来のスラブの烈しさにラテンの熱情を加えたような生き方をします。母方の姓しか名乗れない詩人を生み、さらに父親不明といわれる次男をもうけます。詩人の幼年、少年時代は、この賭けと享楽に漂う母を彼方の存在として離れ暮らす日々の折々に、モナコ、パリ、アルデンヌ地方、再びパリと転々と移り住み、――その間には、賭事の運に見放された母のせいで、弟と二人取り残されたホテルを夜逃げするなどの挿話を加えて――母のあとに従うのです。いわば、母の奔放な生き方の同伴者であると同時に母不在のなか「独

り、好みのお伽噺の世界に生きる者」（文献B－1）として過ごしたのです。

母としてより女として生きる女性は、子供には悪い母親でしかありません。しかし悪い母親ほど子供に対する影響は大きいものです。母親しかいない家族における〝母〟の欠如は、詩人にどのようなあとを残しているのでしょう。詩人のいくつかの恋をながめてみると、決して、母親ひいては女性憎悪に傾いたとは考えられません。それは、ひとつには、母親をめぐり子供と対立する父親がいなかったためでしょうか。あるいは母の不在が母を理想化させたためでしょうか。あるいは一人前の男性となる青年期に近づくにつれて母が女のなかに融合されてしまう傾向のせいでしょうか。ともあれ、アポリネールの場合、一見矛盾するようですが、大母神的な母親への憧憬に裏打ちされて、母を通しての〝完全な女〟への賛美、女性の原像への憧憬へと拡大しているように思えます。詩人の恋の歴史をたどると、それがよく分かります。全き母的なアガペだけでも、全き女的なエロスだけでも、彼には満足できないのです。しかし、アガペとエロスとを完全に調和させる女性――詩人の場合ミューズが加わります――などこの世にいるものでしょうか。そのため、現実の詩人の恋は、自らもまた他からも容認されているように、常に「愛されぬ男」le mal-aimé に詩人をしてしまったのです。さらに自分だけの夢を追うという意味では、正確には、あるがままの相手の女性を愛することができない「愛しえぬ男」le mal-aimant（文献B－2、p. 17: A. Rouveyre）にしています。

二　可愛い訛りの乙女、ランダ

母親によってつくられたこうした精神的土壌の上にいた詩人に訪れる最初の恋は、――まだ恋にいたらぬ〝恋への憧れ〟と呼ぶべきかもしれません――一八九九年アポリネール十八歳の夏、賭事の借金で姿をくらました母親に置き去りにされ、弟といっしょにしばらく過ごしたアルデンヌ地方のスタヴロのカフェーの娘マリア・デュボワ Maria

Dubois と伝えられています。この恋への憧れは、マリアに捧げられたものと推察できる数篇の詩からしか辿ることはできません。『遺稿詩集』の『スタヴロ詩篇』のなかから一篇『恋』（文献A－7）を紹介しておきます。

「恋」

同意の接吻がすんだあと
指輪が薬指にはめられる
唇がささやいたむつごとは
指の指輪に残っている
お挿しよ　このバラ　髪の毛に

（堀口大学訳）

さて、アポリネール特有の恋の様相がほのかにあらわれる最初の恋人は、詩人が「可愛いなまりの乙女」la Zézayante とよぶ十六歳の少女ランダです。ランダ・モリナ・ダ・シルヴァ Linda Molina da Silva, 一九〇〇年八月、詩人が独り立ちした青年となった二十歳の夏のことです。ランダは、ポルトガル系のユダヤ人で友人となったフェルディナンの妹です。ことばに敏感なアポリネールがそのポルトガル語なまりをいとしむ少女です。

それは、初恋ながらすでに〝詩人の恋〟です。アポリネールに詩を書かせ、その詩は不鮮明ながら詩的人物〝ランダ〟を創り出しています。『果実摘み』*La Cueillette*,『ランダへの愛の誓いのことば』*Les dicts d'amour à Linda* その他幾篇かの詩を捧げながら恋は創られていき、やがて一年後の一九〇一年の夏に求婚しますが、初恋の定石通り拒絶されます。失恋した詩人は、『別れ』*Adieux* という詩を書き、その詩の最後に「可愛いなまりの乙女ランダへ捧ぐギョーム・アポリネールの愛の誓いのことば、ここに終わる」Ici finissent les dicts d'amour de Guillaume

Apollinaire à Linda la Zézayante（文献A－6、p. 39）と記して、この恋の結末にしています。

今は背を向けた幼い恋人に、かつて詩人が捧げた詩『ランダへの愛の誓いのことば』を紹介しておきましょう。

「ランダへの愛の誓いのことば」
あなたの名は異国の響きが強く、少し気取りがみえる
でも　それがあなたの名前だから　この上なく甘い。
スペイン語では〝可愛い〟という意味、あなたはまさしく言葉の通り、
だから、あなたを呼ぶたびに、だれもがまことのことを告げている。

その名はドイツ語ではメランコリーを伝える、
四月のそよ風に、かすかにざわめく、
それは伝説の木、叙情ただよう菩提樹、
そこから、毎夜、狂った妖精たちが列をなして現れる。

ともかくも、あなたの美しさを語るこの稀なる名、
それはまた　いにしえの都の名
往時は華麗なバラの花に埋もれていた町
雛鳩たちがまろやかにさえづる島、ロードス島に栄えた町の名。

LES DICTS D'AMOUR A LINDA

Votre nom très païen, un peu prétentieux,
Parce que c'est le vôtre en est délicieux ;
Il veut dire "jolie" en espagnol, et comme
Vous l'êtes, on dit vrai chaque fois qu'on vous nomme.

Ce nom devient mélancolique en allemand,
Aux brises de l'Avril, il bruisse doucement,
C'est le tilleul lyrique, un arbre de légende,
D'où, chaque nuit, des lutins fous sortent en bande.

Enfin, ce rare nom qui dit votre beauté,
Ce fut aussi le nom d'une antique cité
Qui florissait jadis parmi les roses belles
Dans Rhodes, l'île où roucoulent les colombelles.

現実の少女を詩的世界の恋人に変貌させている詩作でも分かりますが、アポリネールは、この初恋においてもすでに、恋に恋をするのみならず、恋を詩にする態度が認められます。後の何人かの恋人たちへ捧げた詩篇、とりわけ「私は手紙に定形詩の形式を使う」(文献A—4、恋文65)といっている恋文がわりの〝書簡詩〟によくみかけられます

が、ランダへの詩のなかにその名の綴り字ＬＩＮＤＡを行頭に読みこんだ五行詩があります(文献Ａ―6、p. 24)。こうしたことば遊びの詩法に凝る作品さえ捧げていることからすると、恋と詩のごく初期の段階からすでに、アポリネールは〝恋する男〟より〝恋する詩人〟つまり言葉の練金術師の立場により傾いていたように思えます。しかし、詩人といえども、ともかくも二十歳前の青き実の初恋です。その失恋も、まだ「愛されぬ男」の個性を認めうるようなものではないようです。ランダの妹イヴォンヌにも「女学生時代そのままの素直さ美しさ……」と歌う同巧の Yvonne を行頭においた詩『イヴォンヌ』などがありますが、友人の美しい可愛い妹たちへの恋ごっことも言えましょう。

三　詩人を〝愛されぬ男〟にした金髪のイギリス娘、アンニー

初恋、だが形式的には求婚もした大人の恋、ランダとの恋に破れ、心の虚ろがまだ生々しく口を開けているアポリネールの前に、金髪のイギリス女性アンニー・プレイデン Annie Playden, la blonde Anglaise が現れます。アンニーとの恋から、いよいよ詩人アポリネール特有の恋の様相がはっきりと現れてくると言えましょう。

ランダに求婚を拒絶されたのは一九〇一年七月でしたが、その少し前の五月頃から、アポリネールは、一年間の契約で、ドイツ系ノルマンディ貴族ミロー子爵夫人の令嬢ガブリエルのフランス語教師になっていました。この時の家庭教師の同僚がアンニーだったのです。子爵夫人がライン地方の領地に引きあげることになり、彼は、生活のこともありましたが、それよりアンニーへの関心絶ちがたく、同行する決心をします。その結果、この北の「ラインの風」吹く地で、アポリネールのなかに流れる北欧の血をめざめさせる、いわゆる〝ライン時代〟と呼ばれる詩人の恋、そして本格的な詩作が育てられていったのです。ちなみに、アポリネールの公刊された最初の詩は、このライン地方にいた一九〇一年九月十五日に文芸小誌〈ラ・グランド・フランス〉に発表された三篇の詩『月のもの』*Lunaire*,『婚

礼』*Epousailles*,『都会と心』*Ville et cœur* です。

初恋というのも、恋に恋するものとして一種の理想化ですが、アポリネールの恋は、それが詩人の恋としての個性をもち始めるに従って、〝詩人アポリネール〟特有と思われるような、恋人のみならず恋さえも理想化する、あるいは詩化する傾向が強まってくるようです。

アンニーは典型的なイギリス家庭に育った、いわば平凡な娘です。しかしアポリネールには、そうした実体など目にはいりません。アンニーを、自分の情熱の火勢のおもむくまま理想の恋人の型に飾り立て、自ら作りあげた幻姿に一途に恋焦がれるのです。

一九〇三年十一月イギリスに帰ったアンニーを、詩人は追いかけ、求婚します。しかしこの平凡な娘は、もちろんのこと、詩人の情熱を受けいれることのできる人ではないし、それどころか、詩人が創りあげる自分の姿が本当のわが身とはあまりにもかけはなれているのを危惧したのでしょうか、また海を越えて追いかけてくる詩人の夢想的情熱の行為に恐れさへ懐いたのでしょうか、結局は、詩人を拒絶します。

この拒絶は、詩想のなかの大恋愛に酔っていたアポリネールを深く傷つけます。アンニーに霊感をえたといわれる『ライン詩篇』*Poèmes rhénanes* (1909) の詩には、アガペ的な恋の色彩が濃いのですが、現実にはもっとエロス的な憧れも強かったようです。〝女〟として全的に愛すれば愛するほど、その拒絶は〝女〟のすべてからの拒絶に思えたのでしょう。しかし、その実体は、おそらく、現実の男アポリネールのもつエロスの面に尻込みする平凡な恋人が、そしてそのピューリタン的家庭が、詩人を拒んだとも考えられます。

ここで、アポリネールのすべての恋の実体を象徴すると思われる『愛されぬ男の歌』*La Chanson du Mal-Aimé* (1909. 5. 1, 〈Mercure de France〉) が生まれます。

お訣れだ　遠ざかって行く女のひとと
切り離しようのない　いつわりの恋よ
あのひとを　去年ドイツで
ぼくは失った
もう　あい逢うこともないだろう　（第十二節、飯島耕一訳）

Adieu faux amour confondu
Avec la femme qui s'éloigne
Avec celle que j'ai perdue
L'année dernière en Allemagne
Et que je ne reverrai plus

「もう　あい逢うこともないだろう」とうたったにもかかわらず、翌一九〇五年五月、愛されぬ男は再びイギリスに渡り、求婚をくり返します。しかし、アンニーは、彼の情熱には心底から恐れを感じたようです。詩人の狂熱からのがれるため、はるか大西洋をへだてたアメリカ行きを決意して――事実その数カ月後渡米し永住することになります――きっぱりと最後の断りを詩人に言いわたします。さすがの大恋人も諦めざるをえません。ここにきて、とうとう、マリアとヴィーナスを夢に描いた詩人の恋心と、現実のごく平凡なイギリス娘との落差の一応の結末がつくのです。一応といいましたが、詩人にとって現実の恋は失われましたが詩の恋は残り、八年後その残照が、たち去りし恋人の今ある姿への怨みをこめた追憶の形をとって、詩に蘇ります。一九一二年に発表された『詩篇』のなかの『ファ

ンニー』*Fanny*（後に『アンニー』と改題）はつぎのように歌い始めています。

テキサスの丘の上
モービルとガルウェストンのあいだに
バラでいっぱいの大きな庭がある
そこには別荘もある
それがまた一つの大きなバラ

一人の女がしばしば散歩する
庭のなかを　ひとりぼっちで
菩提樹にふちどられた道をぼくは歩いて
二人は見つめあう

（第一節と第二節、飯島耕一訳）

ANNIE

Sur la côte du Texas
Entre Mobile et Galveston il y a
Un grand jardin tout plein de roses
Il contient aussi une villa
Qui est une grande rose

Une femme se promène souvent
Dans le jardin toute seule
Et quand je passe sur la route bordée de tilleuls
Nous nous regardons
……

四　詩人に霊感を与えるミューズ、マリー

つぎに登場するのは、詩人の恋の頂点とも考えられる画家マリー・ローランサン Marie Laurencin です。アポリネールが高く評価した素朴派画家アンリ・ルソーの大作『詩人に霊感を与えるミューズ』*La Muse inspirant le Poète* (1909) に、アポリネールと並んで描かれている女神のマリーです。ローランサン自身の作品にも、アポリネールとその仲間たちを描いた絵がありますが、その絵では、詩集を手にして中央に立つアポリネールに寄り添うようにローランサン自身が描かれています。絵のなかのマリーは、頬づえをつき、微笑みをたたえる小頸をかしげて、可愛いアイドルのように花に包まれています。

一九〇七年はピカソの傑作、というよりも絵画史上の傑作とするほうが適切と思われる『アヴィニョンの娘たち』が描かれた年ですが、このピカソをはじめとする〝洗濯船〟にたむろする『新しい絵画』*La peinture nouvelle* (1912) を創造する画家たち（ジャコブ、ドラン、ヴラマンク、ドンゲン、ブラック、ユトリロら）に賛同する理論家として、彼らと親しく交遊をしていたアポリネールは、同年五月のある日、ピカソの個展が開かれていたパリのクロヴィス・サゴ画廊で、当時まだアカデミー・アンベールの画学生であったローランサンと出会います。そして、この時か

らおよそ五年間にわたって二人の恋が続くのです。当時のマリーについて、そして二人の出会いについて、アポリネールの友人アンドレ・ビリーはつぎのように述べています。

「二十五歳位の、利発そうな顔つきをした、意地と知性にきらつく眼つきの、思いがけない口を利く娘……美しい髪が額の上に縮れていた。ロクロで引いたような体をしていた」そして、「ギョームは彼女に惚れた。彼女の方でもまた、ひと目で気づく彼の輝かしい愛すべき精神に魅了された」(堀口大学訳、文献A—9、p. 294)

ともかく、詩人はマリーを愛した。最初は、アンニーに去られた傷心の虚ろのなかにふと忍びこんだものでしょうが、まもなく詩人は燃え上がり、のめり込んでいきます。アポリネールがこの無名の画学生マリーを一人前の画家に育てあげるためにその美術批評で最大級の讃辞でほめまくったことは、よく知られています。アポリネールは、自分が手塩にかけて育てる〝画家ローランサン〟が花開くにつれて、マリーを同時に〝女〟として〝詩の女神〟としてみるようになり、知り合って二年後にはマリーの住まい近くオートゥイユのアパル

Henri Rousseau.
La muse inspirant
le poète :
Marie Laurencin et
Guillaume Apollinaire.
1909 (*Musée de Bâle.*
Phot. Giraudon)

マリー・ローランサンとアポリネール

トマンに移り住むほどになります。しかし、ローランサンのいかにも移ろいやすい少女のような絵からも想像できることですが、アポリネールはまたしても、この女流画家が彼の本性ともいえる夢想、奔放、熱情を受け入れることの出来ない女性であることを知らされねばなりません。その間の事情は、デコーダンが「夢みられた自伝」とよぶ作品『虐殺された詩人』*Poète assassiné* (1916) におけるアポリネール自身の文章でうかがうことができます。

「六カ月がすぎた。五カ月前から、トリストゥーズ・バルリネット（＝ローランサン）はクロニアマンタル（＝アポリネール）の情婦になっていたが、彼女が彼を熱烈に愛したのは一週間だけだった。この愛情の代償として、感激しやすい青年はそのすばらしい詩のなかで彼女を賛美してその名を輝かしいものとし、永遠に不滅なものとした。

『私は名もない女だったが』と彼女は思った。『いまや彼が、この世のあらゆる女のなかで有名な女にしてくれた。』

『……一人の詩人の愛はなんという奇跡を生むものなのか！　だが、詩人の愛はなんと重々しくのしかかってくるものだろう！　なんという悲しみが伴い、なんという沈黙を堪え忍ばねばならないのだろう！　奇跡が生じている今は、私は美しく、栄光につつまれている。クロニアマンタルは醜く、わずかな間に財産を食べつくしてしまった。彼は貧しく無粋だ。彼は明るくない。ちょっとした動作でも、百人の敵をつくってしまう。

私はもう彼を愛していない、彼なんかもう愛してはいない。

私はもう彼を必要としていない。私は私の熱愛者たちだけで充分。ゆっくりと彼と別れることにしよう。しかし、そんなまどろっこしさは私をあきあきさせるだろう。彼にうるさくつきまとわれたり、彼からとやかく文句を言われないためには、私のほうがどこかに行くか、さもなければ彼が姿を消してくれなければならない。』（窪田般弥訳）

有名な画家になったマリーの逃げ足は、アポネリールがたまたま引き込まれた事故ともいえる「ジョコンダ事件」（一九一一・九・七～一二、アポリネールの秘書ジェリ・ピエレによるルーヴル美術館の小彫像盗難事件で投獄されたが、無罪となる）がきっかけになったと言われます。一九一二年八月にはとうとう、マリーの家の近くから離れます。その後友

人の仲介で和解が企てられたりしますが、マリーの心は遠のくばかりです。引っ越しして二ヵ月もたたぬ十月に発表された詩『マリー』*Marie* には「どうして一つの心さえつかむことができないのか／あの変わりやすい変わりやすい心　そしてぼくにはわからない」とか、「マリーよ　一体あなたはいつ帰ってくるのだろう」といった失恋をみとめる諦めとなお絶ちきれぬ未練のいり混じる詩句が並べられています。そしてついに、一九一四年六月、決定的な破局がおとずれます。マリーがドイツ人画家ワエットエンと結婚し、パリを離れてしまいます。またも詩人は「愛されぬ男」となってしまうのです。詩人のいつもの例のように、失恋の決定的事実の後に、その恋情を詩のなかに解き放ちます。〝詩人に霊感をあたえるミューズ〟としてのマリーが、現実のままならぬマリーにわずらわされることなく、生々と詩人の心のなかに生きはじめるのです。マリーの場合、アンニーとは異なり、詩人にとってマリア＋ヴィーナスだけではなくミューズのイメージが大きく加わるだけに、恋の余韻は長く尾を引いているようです。後の恋人ルーや（恋文48、75、82など）マドレーヌ（文献A-5の一九一五・七・三〇の手紙など）宛ての手紙でもマリーのことにしばしば触れられていますし、とりわけマドレーヌに書いている「悲劇の、追放されたパリ女のマリーのことはぼくもひどく心を痛めています。ニームへもこちらにも手紙をくれました」という文面を知ると、マリーへの愛の残映は終生消えなかったように思えます。

ともあれ、マリー・ローランサンは詩人にとって、ほぼ理想に近い女性であったことはまちがいありません。恋愛中は当然ですが、、失恋のあとも、他のどの恋人にくらべても、マリーへの詩が多く書かれていることからしても、アポリネールにとって、マリーは最大の恋人、マリーとの恋は最も大いなる恋だったのでしょう。

五　九つの扉をもつ高貴なるエロス、ルー

つぎは、一九一四年九月二十八日付の手紙で始まり一九一六年一月十八日付の手紙で終わる二百二十通からなるアポリネールの恋文（文献A—4）で、その恋の全貌がほぼ知られるジュヌヴィエーヴ＝マルグリット＝マリー＝ルイーズ・ド・ピヨー・ド・コリニー＝シャティヨン伯爵夫人 Geneviève-Marguerite-Marie-Louise de Pillot de Coligny-Châtillon, 通称ルー Lou です。

この恋は南仏のニースで生まれます。アポリネール三十四歳、ルー三十三歳の折の恋です。当時アポリネールは、戦乱の脅威のもとにあったパリを去り、ニースに下り、外国人としてはむつかしい兵役志願の許可がおりるのを待ちながら、孤独と無為の日々をすごしていました。一方、ルーは遺産相続の裁判がうまく行かず、サン＝ジャン＝カップ＝フェラの従姉の別荘に身を寄せていました。二人の出会いは、アポリネールと同じ建物に住む海軍軍人ボリーの家での阿片パーティの席のことでした。

アポリネールは、すでに名詩『愛されぬ男の歌』を生ましめたアンニーとの恋に破れ、さらに生涯の恋の絶頂ともいうべきマリーに対しても〝愛されぬ男〟を演じた直後にいました。デコーダン氏は『ルーへの手紙』（文献A—4）の序文でつぎのように解説しています。「アポリネールがルーに出会ったのは、マリー・ローランサンの旅立ちそして結婚が残していった感情の空白な時期であった。マリーがもたらしたものは、比類のないエロスの焔火だけではない。大いなる恋への期待も残していった。かつての深い恋は、あっけなく裏切られてしまったものの、それだけに一層そうした大恋愛への期待が、彼の心に保たれた」

空白そして期待、こうしたアポリネールの枯草の野のような心に、いつもの取り巻きとは違う風変わりな詩人への

ルーの戯れとも思えるアヴァンチュールの出来心が、火をつけます。詩人はたちまち渦巻く火勢のごとく夢中になります。長い戸籍名をもつ十七世紀以来の名家のルーを「聖王ルイの血をひく娘」(文献A—5、p. 69) とよび、また自らを「ロシア祖帝の血を受けつぐ者」と称し、高貴なる子孫の大いなる恋のロマネスクに酔います。しかし、ルーという女性は、もともと「物事に無頓着で、活動力が旺盛、エゴイストで、いつも人の心を魅きつけようと構えている。コケットリーというよりむしろ気紛れ、むら気から、表立とうとしたり、控え目を守ったりする女である」そして「恋は、彼女にとっては、熱烈ではあるがほろにがさも伴なうお遊びであった」(文献A—4の序文)。またもや、詩人のロマネスクな大恋愛の夢と、ルーのお遊び的恋の現実との落差です。詩人の幻想の崩れは時を待つまでもありません。出会いからふた月もたたぬ十一月、二人はマントン、グラスへの恋の道行きをしますが、詩人はすでにルーのなかに戯れの恋を感じます。当時の友人セルジュ・フェラ宛の手紙に書いています「あれは一ヵ月続いた。ぼくは識ったのだ、熱愛するひとを。そして一ヵ月半も苦しんだ。……結局は志願の書類に署名し、全てをご破算にして、ぼくの宛先もポーランド名も残さずに、ニームへと発ってしまった……」(前掲序文)。〝愛されぬ男〟の不安と苦悩を予感した詩人は、十二月六日ついに、ニースのルーのもとを去り、ニームの野戦砲兵第三十八連隊に入隊してしまいます。ルーは自尊心を傷つけられたせいでしょうか、直ちに、兵舎に逃げこんだアポリネールに面会に行きます。そして手紙も書きます。しかしルーにあっては何事も長続きしません。アポリネールが無理してつくった休暇の逢瀬も三度で終わり、それ以後は手紙だけになります。マルセイユの逢引き(一九一五・三・二八)でその恋の現実の終わりを悟ったアポリネールはさらに遠く前線へと向かいます。そしてルーとの恋に残るは、詩人ひとりの情熱がつくり出した幻想の大恋愛の証しの膨大な手紙の山ばかりです。

アポリネールにあっては、現実の恋人が背を向け、恋が失われたかと思われる時ほど、詩人にとって真実である夢の恋が、あの「愛されぬ男」の恋が生々とした力を蘇らせるのです。ルーとの場合とりわけ、そうしたアポリネール

独りが演じる〝詩人の恋〟の傾向が強くあらわれているようです。恋文の第二信からすでにルーが詩人に本を書かせるミューズであることが述べられていますし、実際に恋文99からは『わが恋の影』*Ombre de mon amour* という表題のもとに企てられた作品の通し番号を付けた手紙となっています。現実のルーとはほとんど隔絶された兵舎そして戦線にいる詩人の想像力は、スタンダールのいう〝結晶作用〟をまつまでもなく、稀なる寸時の逢引きあるいはわずか数葉の写真だけで、ルーをして詩人の望むとおりの大いなる恋人に変貌させます。

ルーへの恋文に散在する詩（後に『ルー詩篇』*Poèmes à Lou* の表題で一冊の本にまとめられる文献A－6）あるいは感情や夢想の高揚につれて散文詩となる文面では、ルーの実体は消え、恋文99で「近頃は、きみを女性として愛していない。愛の女神、詩の女神、芸術の女神として愛している」と書かれているごとく、詩の霊感源としての、つまりことばとしてのルーなる存在だけが浮きでています。詩人はまるで詩の創造における核のように、あるいはルーの姿などを肖たちどる図形詩に（恋文3、7、8、81など）、あるいは自由詩や定型詩の形式で綴られる書簡詩に（恋文32、88、132など）、あるいはルーの名を行頭に読みこむ技法詩に（恋文78）、ルーなる名の女性を縦横に使っていて、「きみは文学史において重要な役割を果たしたかもしれない」（恋文87）と言わしめるほどです。詩のなかのルーは、とりわけ、詩人が女不在の兵士という環境にあるせいか、そのエロスとしてのあるいはヴィーナスとしての象徴の面が拡大されています。つぎの詩は、戦線から送られた恋文154にあるものですが、エロスとしてのルーをその軀の九つの扉をとおして克明に歌いこんだもので、その代表となる作品と思われます。『砲弾をさがしに行く道すがらに』*En allant chercher des obus* と表題が付けられている八七行からなる長いものですので、その主要部分のみ紹介しましょう。

おお　きみの軀の扉よ
それは九つ　ぼくはその全ての扉を開いた

おお　きみの軀の扉よ
それは九つ　今はその全てがぼくに向かって閉じてしまっている

第一の扉で
明晰な理性が死んだ
ニースでの最初の夜のこと　覚えているかい
扉、それはきみの左の目だった　蛇のように滑りこむ
ぼくの心の奥まで
きみの左目の扉よ　もう一度開いておくれ
（第二の扉は右目、第三は左耳、第四は右耳、第五は口、第六は左の鼻孔、第七は右の鼻孔、第八は尻と続く）
第九の扉で
ぼくの命そのもの
恋そのものが出て行くところ
ぼくは永遠にきみと結ばれる
怒りも消えた完全な愛によって
清い情熱あるいは堕ちた情熱
どちらでも思いのままに情熱の焔にふたりは包まれるだろう
きみの愛の奥深い秘密のうちでは
すべてを知り、すべてを見、すべてを聞くことをあきらめた

この上なく見事な二本の円柱の間
おお　かげりある扉、鮮やかなサンゴの扉よ
きみの手があれほど巧みに開く術を心得ているあの扉よ　もう一度開いておくれ

EN ALLANT CHERCHER DES OBUS

……

O Portes de ton corps
Elles sont neuf et je les ai toutes ouvertes
O Portes de ton corps
Elles sont neuf et pour moi se sont toutes refermées
A la première porte
La Raison Claire est morte
C'était t'en souviens-tu le premier jour à Nice
Ton œil de gauche ainsi qu'une couleuvre glisse
Jusqu' à mon cœur
Et que se rouvre encore la porte de ton regard de gauche
……
A la neuvième porte
Il faut que l'amour même en sorte

Vie de ma vie
Je me joins à toi pour l'éternité
Et par l'amour parfait et sans colère
Nous arriverons dans la passion pure ou perverse
Selon ce qu'on voudra
A tout savoir à tout voir à tout entendre
Je me suis renoncé dans le secret profond de ton amour
O porte ombreuse ô porte de corail vivant
Entre les deux colonnes de perfection
Et que se rouvre encore la porte que tes mains savent si bien ouvrir

現実の生々しいエロスが、ルーの不在によって、次第に結晶作用を起こし、ことばのうちに昇華していく過程がよく分かるとおもいます。しかし、このルーにおけるエロスを謳歌する詩の手紙に続く恋文155において、アポリネールは手紙全体が詩である『愛と軽蔑と希望』*L'amour, le dédain et l'espérance* という長詩をルーに捧げていますが、そのなかでは「……ぼくはきみの美しさの全てを手に入れたと思った　だが抱いたのはきみの肉体だけだった／ああ　肉体は永遠ではない／肉体には享楽の能はあるが、愛はない／……肉体は魂がなくては働かない」と、同じルーに向かって満たされない理想への告白をしています。結局、アポリネールにとって、ルーはエロス＋ミューズではあったが、マリアを望んでも叶えられない女性であったと言えるようです。

六　思い出のように優しい妖精、マドレーヌ

さて、ルーとの恋では「愛されぬ男」になることを内心承知していたかのように、ルーとの恋の進行の途中から平行するように、アポリネールの前にまた一つの恋が現れます。

それは、一九一五年一月二日、ニースでのルーとの逢引きからの帰路の車中で出会ったマドレーヌ・パジェス Madeleine Pagès です。

二人の出会いについては、一九五二年に出版されたアポリネールのマドレーヌ宛の恋文二百通余りを集めた『思い出のように優しく』（文献A―5）にマドレーヌ自身がよせた序文に、詳しく鮮やかに語られています。逢引きを終えてルーに見送られるニース駅のマルセイユ行の汽車に乗ったアポリネールは、ニースの兄の家でクリスマス休暇を過ごしてマルセイユから出る船でアルジェリアに帰ろうとしていたオランに住む二十二歳の娘マドレーヌと同じ車室に座ります。温かい車内の窓に流れる南仏海岸の美しい冬景色、やがて生来美しい女性が好きな詩人の口きりから会話が始まり、マルセイユに着くころには、出版したばかりの詩集『アルコール』(1913) を贈る約束からアドレスを交換するところまでいきます。この折のマドレーヌは、アポリネールの「少々こもった声、横顔、物憂さそうな手の動き、寛ぎを与える眼差し」に好印象をもったようです。それに、中年の軍服姿の男性が詩人であることに驚き「家へのよい土産話になる喜び」だけではなく、手記の最後には「わたしの初めての嵐」とさえ記しています。一方アポリネールは、ルーとの激しいエロスの饗宴の直後のことであったのか、さほどの印象を持ちかえらなかったようです。しかし、ルーとの恋が破局に向かうにつれて、その満たされぬ心からか、あるいはデコーダン氏が言うように前線の兵士としての人恋しい環境からか、アドレスとともに三カ月前の車中の可愛らしい娘のイメージを蘇らせます。四月

十六日、詩集を送れなかった理由と詫びを述べた葉書で最初の便りをします。すぐにマドレーヌから返事がきます。以後は、ルーのときと同じように、毎日のように書かれ、詩が贈られ、「可愛い小さな妖精」という頭辞の恋文になっていきます。ほとんどの時期、ルーとマドレーヌ双方に恋文が送られ、同じ詩さえ捧げられるという奇妙な状態が続きますが、やがてマドレーヌへの情熱が高まっていきます。八月十日の手紙では、マドレーヌの母親に結婚の許可を乞い、好意ある返事をもらい、以後は公然の婚約者として振る舞うようになります。一九一六年の新年の休暇（一九一五・一二・二六～一九一六・一・一〇）は、北阿オランのマドレーヌの家で過ごすことになりますが、ここでまたもや、マドレーヌに捧げた詩のなかで「あなたは実在するのか　ぼくのマドレーヌよ／それともあなたはぼくが求めずして創り出した本質にすぎないのか／孤独を満たすために……」（一九一五・一〇・八の手紙の詩『嘆き』Plainte）と予感しているように、詩人の恋の夢と現実の相違がはっきりとしてしまいます。マドレーヌの方は、普通の家庭に育った令嬢としては、詩人にたいして精神的にも肉体的にもよく応えたようですが（十数篇にのぼるマドレーヌに捧げられた『秘めごと詩篇』Poème secret の内容を考えれば尚更である）、奔放で夢想的な詩人は、家庭の内で見るマドレーヌのリリスムの欠けた姿に裏切られた驚きさえ覚えたのでしょう、情熱を急速に冷化させます。戦線に戻った詩人は、その恋の残り火に詩想の油をそそぎ、ルーとの恋の末期のように、恋の詩化の証しの恋文を書きかさねます。この場合、詩人はもはや「愛されぬ男」ではありません。名詩『愛されぬ男の歌』をはじめとする『ミラボー橋』、『九つの扉』などをつぎつぎと生み出した「愛されぬ男」の状況にはありません。しかし詩作は、二人の女性を相手にしたロマネスクのせいか、あるいはエロスを具現するルーとアガペに近いマドレーヌとふたり合わせて女性ひとりの全体像をつくり上げていたせいでしょうか、相変わらず旺盛ですが、それだけにまた別の意味で幻想の色は濃いと言えましょう。なお悔恨と迷いの続くこの愛の終わりは、アポリネールの負傷とともに訪れます。一九一六年三月十七日、第九十六歩兵連隊第六中隊少尉の詩人は、最前線のビュットの森のざん壕で、右のこめかみに流れ弾をうけ、野戦病院で応急

手術をうけた後、パリのヴァル・ド・グラース陸軍病院に、ついでイタリア病院に入院します。マドレーヌは病院に駆けつけ、世話をしたいと望みますが、アポリネールが断ります。それ以後も二人の間に幾通かの手紙が行き交いますが、八月二十六日の手紙で「どうか会いに来ることだけはやめてほしい、来ればぼくの気持ちが動転するばかりだ。悲しい手紙もお願だ書かないで、ぼくを怖がらせるばかりだ。……」と書き出し、アポリネールはマドレーヌとの恋の結末をつけています。ここにはもはや詩人の恋の本質である「愛されぬ男」の姿はありません。「愛せぬ男」に変わってしまっています。

七　きれいな赤毛の女の姿をした理性、ジャックリーヌ

最後に詩人に訪れる恋（恋と呼べるだろうか）は、「きれいな赤毛の女」la jolie rousse と詩人が名付けるジャックリーヌ・コルブ Jacqueline Kolb です。

一九一六年の夏、まだ療養中の体ながら外出を許されたアポリネールがセーヌの河岸を散歩していた時、戦前どこかの会であったリュビーという名を思い出すかたちで、ジャックリーヌと淡い出会いをします。詩人が彼女に本当に心傾くのは、一九一八年一月から三月にかけて肺充血の重体でヴィラ・モリエール病院に再入院したおり彼女から献身的な看病を示めされてからのことのようです(ルイーズ・フォール＝ファヴィエ『アポリネールの思い出』、文献B－3)。

アポリネールも三十八歳、すでにいくつかの恋の春をそして夏を経て、今は「マリーはただの思い出、ルーは哀惜、マドレーヌはただの後悔にすぎない」(文献B－7)と、そのいずれもが心に疲労を残して過ぎて行ったことを知り、また誇りと陽気さで受けとめていた兵士としての日々も戦傷を残して終わりをつげたことを知っています。重病から回復した三月に発表された『きれいな赤毛の女』では、つぎのように綴っています。

さてぼくはどうやら誰のまえでも常識そなえた一人の男だ
生を認識し　死に関しても一個の生者が識り得るところのことを識り
恋愛の歓びも苦しみも経験し
ときには恋愛についての考えをひれきすることもでき
いくつもの言語を識り
かなりに旅をし
砲兵隊や歩兵隊で戦争も見
頭に負傷し　クロロホルム下に開頭術を施され
おそるべき戦闘で最良の友人たちを失ったこともある
……

激しい季節　夏がやってきた
春と同じように　ぼくの若さも死んだ
おお太陽よ　いまは燃える理性の時だ
　そしてぼくは待つ
ただただ理性を愛せるように　理性が
高貴でやさしい形をとってくれるのを
つねに理性を求めるためにこそ　ぼくは待つ
　理性はすてきな赤毛の女の

魅力的な姿をもつ　　（飯島耕一訳）

Me voici devant tous un homme plein de sens
Connaissant la vie et de la mort ce qu'un vivant peut connaître
Ayant éprouvé les douleurs et les joies de l'amour
Ayant su quelquefois imposer ses idées
Connaissant plusieurs langages
Ayant pas mal voyagé
Ayant vu la guerre dans l'Artillerie et l'Infanterie
Blessé à la tête trépané sous le chloroforme
Ayant perdu ses meilleurs amis dans l'effroyable lutte
.....

Voici que vient l'été la saison violente
Et ma jeunesse est morte ainsi que le printemps
O soleil c'est le temps de la Raison ardente
　　Et j'attends
Pour la suivre toujours la forme noble et douce
Qu'elle prend afin que je l'aime seulement

Elle vient et m'attire ainsi qu'un fer l'aimant
Elle a l'aspect charmant
D'une adorable rousse

「青春は死んだ」そして今はひたすらに「理性を待つ時」と語るアポリネールの前に「すてきな赤毛の女の魅力的な姿をもつ理性」が、ジャックリーヌという名で現われたのです。病床の自分に優しく献身的に尽してくれたジャックリーヌが、愛されているだけではなく理解されていると感じられるジャックリーヌがいるのです。つい先頃のオランの娘には婚約しながら果たさずかろうじて「愛されない男」(偽りの?)の外観を保ちました。しかしもう自らの夢想的情熱によって歓喜と苦悩に翻弄されるような「愛されぬ男」である詩人の恋の時でも、またそれを演じなければならない時でもありません。ジャックリーヌからは愛されているだけではなく理解されている男なのです。そして理性的な優しさや穏やかさが心にしみる心境に達した男なのです。アポリネールはついに〝理性の愛〟を受け入れます。「愛されぬ男」とは正反対の「愛される男」に変わることを受け入れます。

一九一八年五月二日、アポリネールはサン＝トマ＝ダカン教会でジャックリーヌと結婚します。ピカソと画商ヴォラールが新郎の付添いでした。

ミューズとエロスとマリアを求め続けて「愛されぬ男」になった詩人アポリネールの恋の終えんです。そして六カ月間「愛される男」として夫アポリネールは家庭生活をおくった後、一九一八年十一月九日この世から消えました。その時から、丁度アポリネールが現実の恋を失ってから詩の恋の命をたぎらせたように、私たちすべてに愛される詩人〝永遠のアポリネール〟が誕生したのです。

おわりに

ひとを愛するということは本当に不可思議なものです。誰しもひとを愛しますが、愛とはなにか、なぜ愛するのかと問われると、はたと戸惑いをおぼえます。古今東西の万巻書をひも解いても、盲人の象の感をまぬがれえないでしょう。愛はもともと〝交感〟の世界のものなのかもしれません、どのようなことばもその網の目を通してしまいます。

アポリネールの場合も同じです。その恋の現実は彼の素晴らしいことばをしても伝えきれなかったでしょう。ましてや私のことばの力ではおよびません。しかしそれだからこそ恋の〝詩と真実〟なのです、恋の〝うた〟なのです。

アポリネールが、日常のことばであろうと詩のことばであろうと、そのことばによって創りあげた彼の恋そして彼の恋人たちは、私たちにとっては、真実の世界の姿で現われているではありませんか。ランダは友人の妹ではなく「可愛いなまりの乙女」であり、アンニーは家庭教師の同僚ではなく彼を「愛されぬ男」に詩化させた「遠ざかって行く女のひと」であり、マリーはわが手で画学生から育てあげた有名な女流画家ではなく「恋はすぎる　この流れる水のように／恋はすぎ去る」と名詩『ミラボー橋』を苦吟させたミューズであり、ルーはコリニー＝シャティヨン伯爵夫人ではなくエロスの歓喜をうたわせた「九つの扉をもつ軀のひと」であり、マドレーヌは車中で詩を語り合ったオランの娘ではなく「思い出のように優しい妖精」であり、ジャックリーヌは六カ月家庭生活を味あわせてくれた妻ではなく「きれいな赤毛の女のすがたをした理性」なのです。生来的なものか、それとも若き日の環境からもたらされたものかは定かではありませんが、パスカル・ピアのいう少年アポリネールの「寓話やお伽噺への好み」（文献B－1、p.24）の著しい性向が、詩人の天分によって増幅されたかのように、アポリネールは、実在の恋人におかまいなしと言

えるほどに、彼女たちを糧として詩のことばに変貌させ、真実化しています。恐らく、芸術の力とは、現実を真実にそして不滅なものに変える神秘にあるのでしょう。腕の欠けた白いミロのヴィーナス、くすんだ百済観音像に私たちは感嘆し心ゆすぶられます。私たちは、その作者の名も意図も、その往時の姿も知りません。しかしヴィーナス像の、観音像の〝うた〟を心に共鳴させ、真実を受けとめているのではないでしょうか。アポリネールの恋は過ぎさり、恋人たちは死に絶えました。しかしその詩に創造された恋は、恋人たちは、恋や恋人たちの現実を超えて、私たちのなかに生々と現存しています。

詩人アポリネールにあっては何一つ単純なものはない、と研究の第一人者デコーダンは言いますが（文献A－4の序文）、彼の恋の諸相のなかにその詩と真実をたどってきた今、詩人アポリネールにあってたった一つ否定できない確かな真実があると思えます。人の生の浮遊さを人一倍感じていた詩人が、そのことば「詩人が想像しなければ、この世界に何一つもたらされない」と言った通り、とりわけ生のはかなさや移ろいやすさを象徴する恋を「愛されぬ男」の苦渋をおして詩のなかに創造しようとしたのです。この詩に対する全幅の信頼こそ、詩人アポリネールの恋の真実ではないでしょうか。

主要参考文献

A　アポリネールの著作

1　Œuvres poétiques complètes (La Pléiade, #121)
2　Œuvres en prose (La Pléiade, #267)
3　Album Apollinaire (La Pléiade, 1971)
4　Lettres à Lou (Gallimard, 1969)
5　Tendre comme le souvenir (Gallimard, 1952)

6 Poèmes à Lou (Gallimard, 1969)
7 『アポリネール全集』全四巻（青土社、一九七九）
第一巻　動物詩集、堀口大学訳／アルコール、飯島耕一・窪田般弥・入沢康夫訳／恋に命を、窪田般弥訳／カリグラム、飯島耕一訳／遺稿詩篇、堀口大学訳。
第二巻　腐ってゆく魔術師、異端教祖株式会社、虐殺された詩人、拾遺コント集、窪田般弥訳
第三巻　坐る女、宇佐美斉訳／若きドン・ジュアンの手柄噺、カザノヴァ、窪田般弥訳／一万一千の鞭抄、飯島耕一訳／ティレシアスの乳房、安堂信也訳／時間の色、釜山健訳
第四巻　ルーへの手紙他、堀田郷弘訳。
8 鈴木信太郎・渡辺一民編『アポリネール全集』（紀伊国屋書店、一九六四）
9 パリゾ編堀口大学訳『アポリネール詩集』（創元社、一九五三）

B　その他の文献

1 Pascal Pia : Apollinaire par lui-même (Seuil, 1966)
2 Les critiques de notre temps et Apollinaire (Garnier, 1971)
3 Louise Faure-Favier : Souvenirs sur Apollinaire (Grasset, 1945)
4 Marcel Adéma : Guillaume Apollinaire, le mal-aimé (Plon, 1952)
5 河上徹太郎『アポリネールの恋文』（垂水書房）
6 飯島耕一『アポリネール』（美術出版社、一九六六）
7 アデマ著・鈴木豊訳『アポリネール』（講談社、一九七七）
8 ヴェルニュ著・吉田軍治訳『アポリネールの情熱的生涯』（牧神社、一九七七）
9 雑誌『ユリイカ・特集アポリネール』（青土社、一九七九・一）